

虚しく見える義人の死 マルコによる福音書6:14～29

旧約聖書の中でヨブ記、箴言、コヘレトの言葉を知恵文学書と言います。知恵文学というのは、この世の中で「真の知恵は何なのか、何が私たちにとって最も価値のあるものなのか」を文学的に表現したものです。ヨブ記が語っている知恵は、義人も試練を受けることがあり、すべてのことは、神さまが導いているということです。だから、すべてのことを神さまにゆだねて従うことが知恵だと語ります。箴言が語っている知恵は、悪を避け、善に従うことだということです。ここでの悪は、神さまの律法（命令）に逆らうことであり、善は神さまの律法を守ることです。コヘレトの言葉が語っている知恵は、この世のものはみんなむなしなものだということを悟ることです。神さま以外に他のもの、すなわち、富や名誉や権力などを求めるのがいかに虚しいことかを悟ることが知恵だと語っています。そして、このすべてのことは、今日の福音書によく現れています。

今日の福音書は、洗礼者ヨハネの最後について述べています。皆さんもご存知のように、洗礼者ヨハネは、偉大な預言者です。悔い改めの洗礼を宣べ伝え、多くの人々が洗礼者ヨハネから洗礼を受けて従いました。イエスさまは洗礼者ヨハネをこのように評されました。ルカによる福音書7章28節の言葉です。「言うておろが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」イエスさまはこの世の中では、洗礼者ヨハネより偉大な者はいないと言われました。それほど、洗礼者ヨハネは、多くの人々と神の子からも認められていた人でした。しかし、洗礼者ヨハネの最後は悲惨でした。みんなが尊敬し、認められている人でしたが、何の力もない人のように殺されました。信仰の英雄の末路としてはふさわしくない死でした。

このような洗礼者ヨハネの死は、当時の人々には衝撃だったでしょう。おそらく洗礼者ヨハネの働きを見た人は、洗礼者ヨハネがエリヤのように偉大な奇跡を起こすことを願ったかもしれません。しかし、奇跡は起こらず、英雄は死にました。英雄の最後を見た人々は、どんな感じを受けたのでしょうか。神さまに失望したのでしょうか。それとも、神さまもおできにならないことがあるのだと思ったのでしょうか。私たちの周りでも、このようなことが全く起こらないわけではありません。誰から見てもいい人、信仰も深くて隣人もよく助けてくれる人にも、苦難が与えられることがあります。日本の初期クリスチャンであったキリシタンのことを一度思い出してください。彼らにも理由のない苦難が与えられました。彼らが国に害を及ぼすこともなかったし、彼らの信仰や信念が他の人に悪い影響を与えることもありませんでした。彼らは神さまの言葉を信じて、神さまの言葉に従って生きようと努力しただけです。しかし、彼らに与えられたことは、禁教令や踏み絵のようなことでした。なぜ神さまは、祝福を受けることに当然な人々に苦難をお許しになるのでしょうか。私たちの考えでは、人間の計算では、分かりにくいことだと思います。

このような義人の苦難は過去にも、現在にも起こっています。正しく生きることを願い、神さまに従って生きることを願っている人には、不思議なことに苦難がついて来ていました。今日の福音書の洗礼者ヨハネも、このような人だったので、彼にも大きな苦難が与えられたのではないかと思います。今日の福音書の著者は、洗礼者ヨハネが殺されたきっかけについて、彼がヘロデ王の過ちを指摘したからだと言っています。今日の福音書でのヘロデ王は、ヘロデ・アンティパスという人であり、王ではなく、領主でした。アンティパスは王位を狙いましたが、失敗し、領主としてガリラヤ地方を治めた人です。しかし、民の目から見ると、領主や王は同じだったので、アンテパスに王という呼称がついたようです。アンテパスは、自分の弟ヘロデ・フィリポの妻であったヘロディアと結婚しましたが、これは法律に反することでした。律法によると、弟の妻と結婚することができる場合は、ただ弟が死んだ時だけに可能なことでした。このような法律が生じ

たのは、夫を失った女性と子供たちを守るためでした。しかしアンティパスは、ヘロディアと結婚するために弟フィリポを離婚させ、自分も自分の妻と離婚しました。それでは、それほどアンティパスとヘロディアがお互いに恋慕していたかという、そうではないと思います。ヘロディアはユダヤの祭司長と王の血統でした。彼女の母親が祭司長系列の王女だったからです。アンティパスはこのことを政治的に利用したかったようです。自分がヘロディアと結婚したら、ガリラヤのユダヤ人だけでなく、エルサレムのユダヤ人たちも、自分の見方になることができるだろうと思ったようです。当時、エルサレムはアンティパスの兄、アルケラオスが支配してました。アンティパスはガリラヤだけでなく、エルサレムも自分の手に入れ、自分の父親が皇帝から受けた王の称号を受けようと思いました。だからアンティパスは、弟フィリポとヘロディアを離婚させ、彼女と結婚したのだと思います。ヘロディアも王になる可能性が高いアンティパスが嫌いわけではなかったでしょう。

このことをよく思ったユダヤ人はいなかったと思います。しかし、皆が力を持っているアンティパスの顔色を見て、何も言いませんでした。ただ洗礼者ヨハネだけがこのことを指摘し、この指摘が彼の死の原因になりました。もし、洗礼者ヨハネがこのようなことを指摘していなかったら、彼は牢につながれることも、殺されることもなかったでしょう。しかし、洗礼者ヨハネは、沈黙していませんでした。なぜなら、彼は神さまに従っている人だったし、アンティパスはガリラヤを治める領主として律法を守る義務があったからです。さらに、アンティパスの妻であるヘロデヤは、ユダヤ人の祭司長家門の血統でした。彼女は自分がしたことが法律違反になるということを知らないわけではなかったでしょう。これによって、ヘロディアはヨハネを目の敵のように思いました。今日の福音書19節の言葉です。「そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、」

洗礼者ヨハネが沈黙しなかったのは、彼が神さまに従ったからでしょう。彼はすべてのことを、さらに自分の命までも神さまに任せ、この世のものを求めませんでした。旧約聖書の知恵文学書が語っている知恵の者のように、洗礼者ヨハネは、すべての価値を神さまに置きました。悪を避け、善に従い、神さまの以外に他のことを求めていませんでした。私は日本の初期の信者たちも、このような考えを持っていたと思います。そうだったので、彼らは踏み絵ができなかったし、禁教令が下った状態でも、隠して礼拝をささげたのだと思います。そして、このような姿は、むしろ他の人々に畏れを呼び起こしました。今日の福音書20節でヘロデ・アンティパスもこのような姿を見せてくれます。「ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。」権力を得るために結婚も敢行するアンティパスも、ヨハネの教えは当惑しながらも、喜んで耳を傾けました。これが真の知恵を求めている者が持っている力だと思います。

私は義人の苦難の理由は、義人は神さまに従うからだだと思います。正しいことを追求し、この世のものに価値を置かないので、むしろ世の中から苦難を受けるのだと思います。しかし、義人の苦難が無駄に終わるのではありません。今日の福音書の後には、イエスさまの弟子たちの活発な活動が書かれています。これは、洗礼者ヨハネの死が世の者から見ると、虚しく見えるかもしれませんが、神の国は、洗礼者ヨハネのような人々によって続けて伝えられているということを示しているのだと思います。第2、第3の洗礼者ヨハネによってキリスト教は伝えられ、第2、第3のキリシタンたちによって私たちにも福音が伝えられたのです。イエスさまも、私たちとどこに来られ、苦難を受け、死なれました。しかし、私たちが忘れてはならないのは、その死から復活が始まったということです。私たちクリスチャンの苦勞を通して、この世に神の国が臨むのであり、私たちの苦難は、天国という報いで返されるのです。この世が追求するもの、世の判断などに耳を傾けない私たちになりますように。神さまに従っているすべての者に、神さまの栄光と真の知恵がありますように主の御名によって祈ります。アーメン